

# 転スラに転生したら 『最強』だった件

村田雄介先生の女の子絵好き野郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『転生したらスライムだった件』の世界に転生した!?

しかも『ワンパンマン』のサイタマになって……『最強』になってチートスタート!?  
これは、転スラ世界に転生したらサイタマの体になって、最初から最強のヒーローとなつてチートな強さで無双していったら面白いんじゃないか、と軽はずみな考えで二次創作始めました。

※タグにBLとありますが、リムルは両性なので作者はBLだと頑なに思っていない。リムルは女であり男なのだ!

※亀更新。誤字脱字たまにあり。

# 目次

第1撃目「サイタマじゃない俺は一体何者なのか」	1
第2撃目「最強でも護れない」	13
第3撃目「最強がスライムに会った件」	21
第4撃目「スライムに恋をした《最強》」	37
第5撃目「ガビル参上！」	52

# 第1撃目「サイタマじゃない俺は一体何者なのか」

意識が混濁している中。

一筋の光が照らされる。

そこから聞こえるのは、女の声。

『確認しました。あらゆる物理攻撃を無効化する身体を作成します』

身体……？

そういえば、俺の身体は、どこだ？

俺の……からだ……？

俺のからだって……どんな感じだったかなあ……。

ぼんやりと思えば浮かぶものは、大好きだった漫画の主人公。

絶対に負けることがないけれど、そのせいで無気力になってしまったヒーロー。

ちよっとだけの修行だけで、『最強』になって爽快に敵を一撃ワンパンチだけで、ぶっ

飛ばす最強のヒーロー。

誰よりもヒーローというものを求めた『最強』。

その最強になった代償が坊主<sup>ハゲアタマ</sup>つていうのも笑えた。

『確認しました。エクストラスキル《強者》を獲得しました』

あのヒーローは、誰にも負けない『最強』だった、な。

『確認しました。エクストラスキル《強者》を進化させます。……………成功しまし

た。エクストラスキル《強者》をユニークスキル《最強者》に進化しました』

それは凄い。

最強者、か。

それは、きつと、さいこ、う、なんだ、ろう、な。

そこで意識が微睡眠と共に暗闇に落ちていった。

歩いてどれくらい経っただろう。

本当に長い間歩くが、どうやらこの身体になって以来、方向感覚までおかしくなった。『この身体になってから』という言葉に引っ掛かるかもしれないが、そのままの意味である。

緑溢れる大森林の中、ずっと歩き回っている禿頭とくとうを煌めかせ、背には白のマントを靡かせて、手には熱血の赤い手袋で拳を固く握らせ力強く呟いてみせる。

「俺は別に最強サイタマになりたかったんじゃねえー!!」

叫ぶ。

ただそれだけの筈なのに、その叫び声だけで近くにあった木々がキシキシツツ!! と悲鳴を上げる。それだけでなく、どこか地面まで揺らいだような気がする。

改めて声を元のボリウムに下げ、またも呟く。

「なんで、どうして?」  
「なんで目が覚めたと思ったら変な森に来てるの?」  
「ここどこなの?」  
「なんで俺は漫画のキャラになってんの?」  
「今時流行りの転生モノですか?」  
「俺

そーゆーのいいですから、マジで」

誰が聞いてるわけでもなく、文句を垂れる。

「……あー、だからといってだ。俺の生前が全然思い出せない。なんでか都合が良く思  
い出せない。ご都合主義かこのやろう……。なんでここに居るのかさえ分からない。  
……っていうか、転生なの？ それとも転移モノか？ 俺は自分になるのは勘弁願いたい  
けど、読むのは好きだったから色々思いだせる……。というか、俺は生前何者だったの  
か分からないというのに、そういうのは思い出せるのか……」

何処に向かえば良いのか分かる筈もなく、宛もなく歩く。

どうでも良いが、この森無駄に広い。

「誰かに会いたいもんですね〜」

ここが日本じゃないのは分かっている。

さつき気持ち悪いほどデカイ昆虫に会った。

怖かったので、腰を低くしてその場から逃げたものの。自分は『あのサイタマ』になっ  
てるんだから余裕じゃん、と思ってるときには既に遅く。

脳内で逃げたい！ と強く思ったせい。踏ん張った脚力でどこかの大岩に突っ込  
んでいた。

正に弾丸のごとき速さ。

そして自分の頑丈さに戦慄を覚えた。  
全然痛くないのだ。

まったく痛覚を覚えていない。ぶつかった、という感覚はあるが痛くはないのだ。

実際、大岩を砕いて這い出てきて、タラリと冷や汗が流れ、一言。

『マジか』のサイタマもよく言っていたものだった。

下手すると、あのサイタマの軽い修行より酷いかもしれない。

だって、本当になにもしないであの身体サイタマになれたのだとしたら。申し訳なきが出てきた。

試しに空に高く跳んでいることをイメージしてジャンプするとどうだ。

簡単に飛べた。

「うおおおおあああああああー♪♪♪!!」

物凄く楽しかった。

重力を無視する動き最高だった。

しかし、そのあと襲い掛かる浮遊感。そして、落下

「うぎゃあああああああー!!!」

悲鳴を上げながら落ちる。

轟音響かせて地面に激突するが、

「うおっは！ わは！ わははは！ ガハハハ!! 痛くなあーい！」  
全然痛くない。

「ヤバイぞこれ！ 中毒になるヤバイ！」

語呂悪くなるぐらいテンションが上がっていいのだが、そうも言ってもらえないモノ・ノ・が見えた。

さつき高く空を跳んだ際、見えた。

「……なんか、村襲われてね？」

豚頭みたいな人の集団が、人間に角が生えた所謂『鬼』らしき人たちが襲われている。

「……ヒーローとしては見過ごせないな」

遊んでたお陰で、大分身体の使い方が分かった。

それならば、この先どうするか決める。

※

「逃げろ！ お前たち!!」

そう叫びながら、既に何体かの豚の人たちを斬り倒しているのか、刀には血糊が付き、ボロボロになりながらも守っている様子だった。

「親父っ!」

「父様!」

そしてその家族らしき息子さんに娘さんを発見する。

「家族仲良く死ねエ!!」

しかし、襲ってきたであろう豚の人たちは巨大な鉈なのか剣なのか分からない武器で容赦なく襲おうとしている。

しかし、まるでスローモーションの如く動きが鈍く見える。

そんな遅い動きをする豚の人たちを軽く殴ってみせたのだが、

「( )ばあああああああ!!!」

物凄い勢いで吹き飛んでいった。

砲弾のような効果音と共に。

「うそ〜ん」

殴った本人でさえ吃驚ビックリものだった。

集団。いや軍隊とも言えるくらいの大量の兵だった豚の人たちは一斉にこちらに視線を向けてきた。

「なんだあのハゲ頭は!? 大鬼族オーガの仲間か!」

「関係ない! 我らに刃を向けたことを後悔させろお!」

そう言つて襲いかかってくる。

何故さきほど殴つた威力とかガン無視してツツコンでくるのだろうか。

「俺は、趣味でヒーローをやっている者だ」

忘れるなかれ。

俺、今サイタマ。

普通にこんな決め台詞が出てきた。

キャラに成りきってやがるよ俺！

そんな俺の発言に青筋ピクピクの豚の人たちは口から汚いくらい唾を吐きだしながら怒り狂う。

うわあくめつちや怖い。

「なにがヒーローだあああああああ!!」

数の暴力。

絶対なる暴威が俺に襲い掛かってくるといふのに、何一つ脅威と感しない。『怖い』という感情はある。生前怪我や病気にだっとなったことのある俺だ。だから、あの豚の人たちに噛まれたら人間の柔肌なんか簡単に食い千切り破ること間違いなしだろう。

怖いけど、脅威と感しない。

(対処できるからだろうか……)

あのサイタマになった自分なのだ。

絶対に負けることなどあり得ないのだ。

「一種の催眠効果かなコノヤロー」

猛る叫び声を上げ、襲いかかってくる豚の人たちを、

「死ぬなよ」

ワンパン  
一撃で終わらせる想像しかできなかつた。

※

大鬼族の頭領である族長は、空いた口は塞がらなかつた。

魔人の一撃でも見たかのような。

いや、『魔王』の一撃にも勝るその砲撃とも言える強大な一撃に。

「……魔力を一切使わないので、たったの、拳一つで……」

大鬼族の里を覆うように奇襲していた豚頭族たちが、嵐にあつたかのように吹き飛ばれていった。

「山を抉るだ……」

持っていた刀を握る力も無くなるほど、脱力してしまった。

大鬼族の里の近くにあつたであろう山が、丸く綺麗に抉られていたのだ。

あの攻撃を食らった豚頭族がどうなったのか知るよしもない。

「親父！ 大丈夫か！」

「父様！ ご無事で!？」

最愛の子供たちが駆け寄ってくるが、残りある力で二人を後ろに下がらせた。

「お、お前たちは下がれ」

大鬼族の代表として聞かねばならなかった。

この『御仁』に、確認を、

「よお。無事か」

どう声をかければいいのか迷っていると、向こうから声をかけてきてくださった。

失礼のない態度を取りながら、

「は……はっ！ 助けていただき感謝を！」

本来、人間に舐められない態度を取るもののだが、この御仁は次元が違った。

『人間』の枠に収まるものじゃない。

それに、人間だったとしても感謝しかない。

大鬼族の若者を逃がすだけで大変だったというのに、今じゃ半数以上の大鬼族が生き

長られた。

家族の別れもせずに済んだのだ。

禿頭の人間は、にこやかに微笑んで、

「無事なら良いんだけどさ。ここってどこか、分かります？」

強さに驕らず、己よりも力弱い者に対しても礼儀正しく接してくれたことに軽く感動を覚える。もし自分があんな力を持っていたらなば、きつと力に溺れていたに違いないというのに。

大鬼族の頭領がそんな考えをしているというのに、当の本人は『やべえ何も反応ないの超気まずい。ていうかショック』と小心になっていた。

「どうか！ 貴方様のお名前を御お聞かせください！ どうか！」

低姿勢のまま、本当に心の底から感謝してる鬼の人たちに頭を下げられて困っているハゲはどうとう、自分の名前を教えようとしたのだが……。

「……………俺の、名前なんだっけ？」

名前も分からず、歩き回っていたのだった。

## 第2撃目「最強でも護れない」

まったくといって良いほど、好待遇を受けることになった自称・記憶喪失の青年、禿げ頭の男。

今この瞬間から逃げ出したいと考えている禿げ頭が、ピンチのところを助けて下さった恩人である禿げ頭男を頑なに何処にも行かせようとしめない大鬼族オウガの人たちから様々な融通を聞かせてもらった。

まず住む場所だが、屋根と衛生的に普通な所ならどこでも大丈夫だった禿げ頭だったが、大鬼族の長が住まう江戸時代の日本のお城のようは立派な建物のある一角の部屋を借りる。

「さあさあ、サイタマ様。この城は自分のものと思い、お寛くわんくださいませ」

大鬼族の長であろう燃えるような赤髪と立派な角を持つている族長は、その立派な巨躯でありながら洗練とした動作で、江戸時代の侍がお殿様に何か言う時みたいに両の拳を床につけ、深く頭を垂れてそんなことを言う。

どちらかというと絶対によこの城主は誰かと聞かれたら誰もがこっちだと思おうくら

い堂々とし、雄々しくも知性溢れる瞳を持つこの男だ。  
因みに。

禿げた頭なのに大鬼族より鬼強いマント男は《サイタマ》と名乗った。

生前の名前が思い出せないなんて凄いショックを受けていた自称・サイタマ。

しかし、自分の今の姿は紛れもなく《最強のヒーロー》サイタマなのだと言覚する。自覚しない方が危険だ。

(能力だつてサイタマみたいにぶつ壊れた強さに違くない)

ズルして最強スタートしているとか何だか気分が下がっていた自称サイタマだったが、本腰を入れて『サイタマ』になろう、と思いは始める。

「まあ、余り畏まるなよ。そりゃあバカみたいな力持つてるけどさ。なりふり構わず暴れることなんて無えんだから」

「はっ。サイタマ様はお心までご寛大でございませぬ。しかし、感謝の意をどうか御受けいただきとうございます。我ら大鬼族は豚頭族によつて壊滅寸前まで追い詰められておりました」

そんなところを、サイタマがたったの一撃でそれを全て吹き飛ばした。

「この世は弱肉強食。弱き者は強き者に言うことを聞くもの。そんな世だというのに弱者たる我らをわざわざ助けて頂いた貴方様には返しきれない御恩があるので。ど

うか我らを、貴方様の配下にさせていただきとうございます」

(とんでもねえ事になってんじゃねーか)

助けを求められたら助けるのがヒーローというもの。

だから別に配下にしたらいからって助けた訳でもないサイタマは、それをにべもなく断ってしまうが、それでも食い下がる大鬼族の族長。

「いいえ！ どうか我ら大鬼族<sup>オカ</sup>を貴方様の配下に！」

「いいって別にマジで」

サイタマは自分が居るからこんな状態になっているなら今すぐでも出て行こうか？  
等と族長に言うのと、『とんでもございませぬ！ 分かりました。申し訳ありませんでし  
た……執拗に過ぎましたね。どうか、どうかここでお体をお休みくださいませ』と巨軀  
の癖にシユン、と体を縮込ませた族長は、給仕の者にサイタマの世話を申し付け、どこ  
かに向かつていった。

※

大鬼族の族長とて、《大鬼族》の誇りは勿論あつた。

『鬼』は何者よりも強く、そして大らかではないといけないのだ。

しかし、その全ての大鬼族の里を救つてくれたのは脆弱な筈の人間で、禿頭が特徴の青年はその強さが常識を軽く上回つていた。

しかし、全滅を恐れ、後継者たる鍛え抜いてきた自慢の息子と、そして里における重職である巫女にして最愛の娘たちを救つてくださったあの青年には既に過大な恩があり、頭が上がらなかつた。

先程言つた言葉に偽り無し。

この世界では『弱肉強食』。

弱き者は淘汰される。

「なんとかあの方を我ら大鬼族の味方につけなければ」

赤い髪を揺らしながらも、その強き瞳を持つ鬼の族長は決意を新たにしようとするが、

カンカンカン!!

襲撃され、未だ建て直し途中であつた物見櫓から鐘の音が村に鳴り響く。

「そんな！ まさか！」

既に豚頭族<sup>オイク</sup>の軍勢が夜襲に備え、襲ってきたのか！

大鬼族の族長は真つ赤な髪とは裏腹に、真つ青になった顔で再び物見櫓に向かおうとするも、悲鳴が多く聞こえてきた。

豚頭族<sup>オイク</sup>の鬨の声が族長の耳まで聞こえてきた。

最早手は打てない。

族長は大鬼族の種を絶えさぬ判断をしなければいけなかった。

※

「……またきやがったのか」

サイタマは立ち上がった。襲われている鬼の人たちを助けるべく、ヒーローマントを靡かせて、立ち上がる。

しかし、それを遮るべく男も立っていた。

「お待ちください。サイタマ様」

「鬼の族長……？　なんだ、早く行かないと仲間がブタにやられ……」

決意に満ちた瞳を向ける鬼の族長に、最強の力を持っているサイタマは初めて気圧さ

れた。

『決死の覚悟』を込めた瞳は、サイタマの声を押さえ込むことに成功させる。

鬼の族長の後ろには既に若い大鬼族の者たちが集まっていた。

中には族長に似た者もいる。

「察して頂き、誠にありがたい。流星はサイタマ様」

「……俺も」

「いいえ。後顧の憂いさえ……サイタマ様にお願ひできるのなら、本望」

言葉少なく、鬼の族長はしっかりと告げる。

武より越えし『神』が宿った拳を持つ男に、紅に燃える朱髪を揺らして頭を下げる。

「どうか……どうか我が子と、里の者たちをお守りお願ひしとうございます。何とぞ

……何とぞ」

「……あなた……」

「残りの戦士たちも、若き芽を護る為に戦っております。私も後に残り、戦士たちの魂と、豚どもの腐った魂を焼き炙りながら共に黄泉にへと参ります」

誇らしげに笑うその鬼の男は、日本に生きた誇り高き戦士サムライのそれだった。

美しい波を打つ刀を抜き、それを一寸眺めてから、背後に居る息子にへと渡す。

「……まだ教え足りぬことばかりだが、これも弱肉強食の世。いずれやってきた結末だ。

強くなければ滅びるまで」

「……………」

「お前は、きつと俺より強き大鬼になれるであろう。自慢の息子よ」

「…………ぐつ！…………いま、まで、一度も褒めたことが、なかつたくせに…………」

「当たり前だ。図に乗るからな」

そう言つて、同じ赤い髪をした青年の鬼に刀を渡し、そして胸に拳を当てる。ただそれだけで息子は涙を少しだけ流し、必死に感情を切り替えようとしていた。

「娘よ、妻に似て美しく育つた姫よ。そなたには沢山の家事を任せてしまっていたな。苦労ばかり掛けた…………。良いことがあるとすれば、お前を嫁にする男を眺めずに死ぬることよ。まあ…………孫は見たかつたな」

「…………ううう…………ちちうえ…………ちち、うえ…………父上え」

「泣いても良い。しかし決して歩み止まるな。振り返ること決して許さぬぞ。もしも黄泉の国に来たならば再び鬼の拳骨を食らわせようぞ」

そう厳しく言いながらも、族長は娘を優しく抱き寄せて、最後の抱擁をする。

他の者にも声を掛けていき、泣き崩れる者ばかりの中。

サイタマはこの理不尽さに黙ってはいられなかつたが、この鬼の族長の覚悟を踏みこじることが出来なかつた。

救えるかもしれない、しかし何故このような方法を取ったのか。

(今は勝てる……けどその後は？　ずっと離れずに居れば良いってか……？)

無理だ。分身でも出来れば良いが、相手は必ず一人ずつ確実に潰してくる。

そうなるって意味が無い。

死んで護つていった大鬼族の戦士たちの死が、無駄に終わってしまうのだ。

この世界にきてすぐに出会った種族だが、とても愛情ある種族で、命を懸けて護るその姿は、人間と同じであった。

サイタマは、族長と向き合う。

「貴方とであえて良かった。戦士として、存分に戦えて、終わることに……。そして面倒事を押し付けてしまい、本当に……」

「……面倒じゃねえよ。必ず護ってやるからな」

「……かたじけない……」

そう言つて、城から裏道に繋がる隠し通路を進んで大鬼族の里を脱出したサイタマと大鬼族一行は、ジュラの大森林の中に迷い込んで行った。

### 第3撃目「最強がスライムに会った件」

大鬼族オウガの里から逃れたサイタマは、生き残りのオーガの人たちとジユラの大森林と呼ばれる大きな森林を当てもなく進んでいた。

しかし、目的はしつかりとあった。

「《魔人》と会った？」

「はい。サイタマ様にお会いになる前に。既に我らは仮面をつけた魔人と会っていました」

いきなり襲いかかってきた豚頭族オウクたちと関係あるかどうか分からないが、サイタマは光る頭皮を煌めかせて考える。

進むサイタマに追い付くように、隣には族長の息子とは対となるような青い肌と一本の角を生やした青年も付け加えるように言う。

「奴はゲルミュッドと名乗っておりました」

「ゲル……なんだって？」

「ゲルミュッドと」

「……呼びづれえな、ゲロで良い。あとは吐瀉物」

「サイタマ様が申されるのであれば」

しかし本当に当てもなく歩いてしていると不安になるサイタマは、族長の息子に何処に向かうか聞いてみると、

「我らはサイタマ様に付いていきます」

「なるほど、行き先決まってねえんだな」

それとなくサイタマが何かありそうだな、と直感で進んでいくことに決めると、何か近寄ってきてることに気づく。

「何か来てるな」

「……分かるのですか!？」

「ん〜なんか、微妙に分かる」

直感は当たり、サイタマたちに近寄ってきていたのは狼に乗った緑の肌をした亜人たちであった。

「止まるっす! 何か用があつて来たんすか!？」

そう勢いよく突っ込んできたのは、この大鬼乗ったシユウダンノ代表格みたいな奴がそう言ってきた。

「ゴブリンたちです」

族長の娘たる巫女さんが耳打ちしてくれたことが嬉しく感じていたが、サイタマの最強のポーカーフェイスのまま頷く。

正にファンタジーに必要な奴らが出てきた訳なのだが、敵対心が強い。

もしかしたら縄張りに入ってしまったのかもしれない。

サイタマはやれやれ、といった感じに大人な交渉にへと持ち込もうとしたが、族長の息子はそうはいかなかった。

「どうした、ゴブ太！」

「名前持ち魔物だど!？」

この一瞬のやり取りだけで、何故か臨戦態勢に入る大鬼族の一行。サイタマだけ取り残されている。

「ど、どうしたお前ら」

「お下がりをサイタマ様！ コイツら名前持ち！ きつと魔人の手下たちです！」

「はい。普通のゴブリンたちより魔力もあります！ サイタマ様、こちらに！」

そうやって紫色の鬼娘と鬼巫女さんに引き寄せられるサイタマ。

「なんだか分からないっすけど、敵っすか!?! なら容赦しないっすよー！」

「ガルルル!!」

狼に乗ったゴブリンたちも、こちらが臨戦態勢に入ったことを確かめた後に構える。

「流石は弱肉強食世界。話し合いから始まらんのか。ねえ、じいさん」

「そうですね。命の殺り合い……どちらが先に動くかで命運が決まりますぞ」

この鬼の一行の中、老境に入っているであろう白髪のお爺さんも、泰然自若の剣士然としたその姿は、正に剣鬼の姿。油断も容赦もなくなつたそれは、老人と呼ぶには危険過ぎた。

そして、それはその鬼の翁だけではなく、他の鬼の男たちも殺気立っていた。

それもその筈。

故郷を焼き野原にされたのだ。怒りが湧き出ない方がおかしいだろう。

サイタマは一人でゴブリンたちを戦闘不能に出来るのだが、ここは後ろに下がって様子を見ることにした。

戦闘はその後すぐに起こり、敵側には高速に移動ができる狼に乗っている為に、敏捷性には負けていたが、それ以外では大鬼族が有利だった。技の冴え、判断の切り替え、力の入れ方。何よりも、

「うわあああああ!!」

族長の息子の特殊な炎と、その妹の魔法。接近戦において白髪の鬼お爺さんの抜刀術と剣術は恐ろしいもので、一度その剣術を見たゴブリンたちも無理に近寄ろうとしないでした。

このまま勝てるか、と思っていたのだが、名前持ちネームドの中でも、ゴブ太、リグル、ランガと呼ばれた三人は中々食い下がっていた。中でもランガと呼ばれる大きな魔狼が強かった。

しかし、それでも大鬼族は強かった。

相手を殺すこともなく、徐々に無力化させていく。

「確かに俺が出ることもなかった……って、うん？」

しかし、それでもまだ食い下がってくる二人のゴブリンと一匹の魔狼の元に、何者が近寄ってくるのをサイタマは感じる。

「状況を説明してくれ、リグル」

着いてすぐに、負傷者に何か回復薬のようなものをぶちまけてやってきたのは、子供ぐらいの慎重の人間だった。

こんな子供が魔物たちを使役していたのか？

サイタマがそう思っていると、族長の息子から怒気が膨れ上がったことを感じる。

「その……仮面は……！」

族長の息子はふと呟いて、その子供に睨みつけていると、

「おい、お前ら！ 事情は知らんがウチの奴らが失礼したな。話し合いに応じる気はあるか？ ……ってうん？ なんかお坊さんも混じってね？ いや、それにしても何か

ヒーローっぽい格好だけど」

おお！ ヒーロー分かるか！ と空気読まずに言うところだったサイタマ。本物のサイタマは空気読まずに本当に言うから怖い。メンタル強すぎだと思う。しかし、この世界でサイタマになっていた禿頭どくどうの男は、そこまでメンタル強くないので黙って成り行きを見守る。

あの子供がつけている仮面に反応してみせるのは、鬼の一行。

「正体を現せ！ 邪悪な魔人め！」

「はあ？」

「見た目を偽り、妖気オーラを抑えているようだが甘いな。オーガの巫女姫や俺の目は誤魔化せん」

「お、おいおいちよつと待て、俺がなんだつて!？」

「魔物を使役するなど普通の人間ができる芸当ではあるまい」

確かに出来ない。『普通』なら。

しかし、ここは異世界。自分も含めて『普通』からかけ離れた存在が居る以上、族長の息子だけの材料判断だけじゃ不安に感じたサイタマだったが、口を出さずに見守る。

「な、なあ。あのおく」

「ふん！ 貴様の言葉など聞く耳を持たん。全て、その仮面が物語っている！」

「な、仮面？ 待ってくれ。何か勘違いを……」

「同胞の無念。その億分の一でも貴様の首でも贖あがなってもらおう！」

父の仇を見付けられたことによる憤怒に矛先を見出し、族長の息子はその父より授かった愛刀を鞘から抜き払い。鋒きつせきを仮面を付けた子供に向ける。

サイタマは話を置いておかれていたが、これだけは分かった。

「お前らまさか、その子供と戦うんじゃないやねえだろうな」

サイタマのその言葉が発すると、周囲のオーガたちは体を強張せる。サイタマが意思がこれでは無いのだと分かるが、代表として赤髪の息子は重く呟く。

「お許し、サイタマ様。たとえ貴方様でも、この怨讐は止めることが出来ません。同胞の仇を……親父の仇を！」

サイタマはきつと《最強》である。しかし、強さは感情を無視することが出来ない。

サイタマはそれから口を閉ざした。

「さあ……正体をみせろ」

ここに、邂逅の幕が上がった。

※

結果的にいえば、大鬼族の一行は簡単に蹴散らされていた。

異世界転生でもしたら、色々な能力を目覚めて、無双していく感じだったら、きつとああいうことを言うんだろうな、と思うくらい。清々しく倒されていく。

殺されてはいない。簡単に無力化させられていく。

「エビルムカデの《麻痺吐息》、ブラックスパイダーの《粘糸・鋼糸》、アーマーサウルス装甲蜥蜴の《身体装甲》。不意打ちへの反応速度を見るに《魔力探知》も持っているでしょう。他にも多数の魔物の業を体得いるやもしれません。ご油断召されるな、若」

白髪の鬼お爺さんの言う通り。今上げた業で族長の息子と剣士の爺さん以外倒された。

サイタマはただ何もしないで居るのは流石にまずいから、巨大な狼、ランガと呼ばれたやつから巫女姫を守りながら、それを眺める。片手間に。

「確かに貴様は強い。だからこそ確信に至った。やはり貴様は奴らの仲間だ。……たかが豚頭族オウケツごときに我ら大鬼族オウガが敗れるなど考えられぬ……」

「オーク?……おい、さつきから何を……」

「黙れ! 全ては貴様ら魔人の仕業なのだろうが!!」

「待てよ。それは誤解——」

サイタマには視えていた。

まるで仙人が使うかのような、地を縮めるような移動方《縮地》で仮面の子供の後ろに立った鬼の老剣士は、必殺の剣閃が横一閃に奔るが、相手もギリギリのところまで《魔力探知》によってそれを避ける。

「……………!?!……………」

「……………ふむ。……………ワシも耄碌したものよ。頭を刎ねたと思ったのじゃが」

しかし、老いても剣鬼である白刃の迅さ<sup>はや</sup>にまでは避けること叶わず、腕を切り落とされた。

しかしサイタマにはそれが違和感が一番に襲う。

（人間じゃねえのかやっぱ）

切断された腕から大量の血が出ると構えていたサイタマだったが、一切の液体らしきものが噴出することもなく、ボトリと腕が生々しく落ちるだけだった。

サイタマの視力にも見えていたが、切断面には何やらプルプルとした青い液がジェルみたいに固まっている。

「どうやら蛮勇の方だったらしいな。真勇とは程遠い慢心で簡単に腕を切り落とされたな魔人。右腕を失い発狂しない胆力は褒めてやる」

族長の息子も、老鬼程では無いにしろ移動速度が早く、仮面の子供の前まで移動し、「一人で俺たちを相手取ろうとしたその傲慢さが貴様の敗因だ。冥府で悔やみ続けるがいい！」

そして、その若さからくる老鬼より重きに置いた重剣の一刀で両断する。

子供はそれを避け、重剣は大地を抉る。

そして子供は避けながらも切り落とされた腕を拾って距離を置く。

なんで拾ったと思っていると、その腕を吸収した。

「スキル《超速再生》だ」

「なに!?!」

「……!?!……」

見事に切り落とされた腕を吸収したあとすぐに再生させ、元の無傷のままに戻る子供に、鬼たちは狼狽える。

こんなもの見せられたら鬼たちでさえ驚くもの。

そしてサイタマには既に、この世界はファンタジーで出来ているんだと順応するよう、深く考えないで見ていた。

「まあでも、片手を切り落とした程度で俺に勝ったつもりでいたのか?」

「化け物め!」

これには危機感を覚えた族長の息子は、己の自慢の炎を生み出す。

「オーガフレイム《鬼王の妖炎》!!」

周囲を包み込むように、仮面の子供を巻き込みながら鬼の業火で滅却しようとする。

「やった……のか」

フラグが立ちっぱなしの言い方の族長の息子だったが、まさしくそれを回収するべく、主人公みたいな仮面の子供はやはり何故か炎がまったく効いてないようで、平然と歩いてくる。

「残念だった。俺には炎が効かないんだ」

(やっぱりかい)

サイタマは巫女姫を背に隠して、戦いを見守りながら、やはり主人公っぽい仮面の子供は堂々と言い放つ。

「だが、確かに俺はお前たちを甘く見ていたようだ。少し……」

本気を見せてやろう。

そう言い放って、仮面を取った子供の顔を見たサイタマは、衝撃を受けた。

それは正しく脳髓の深くまで雷が落ちたように、深く深く、深淵にまで落ちる。

今、サイタマは、恋に落ちた。

※

正しく、衝撃が走った。

その後、何が起きたのか忘れてしまったかのように。

あんな美少女はみたことが無い。

本来のサイタマに、恋愛感情があつたのか疑問だが、こちらのサイタマには十分にその感情が昂っていた。

サイタマは動き出す。

二度と無い。この幸福チャンスに。

しかし、今の展開はサイタマにとってよろしくない。

オーガたちのことを託されたこともある。

己の感情を唇を噛み締めてそれを耐える。

「本当の炎をみせてやろう」

そう言つて、美少女（美少年？）は堂々として、魔力を込めて、一気に膨れ上げていく。

「エクストラスキル《黒炎》」

掌を翳して、上方に巻き上げたのは、大鬼族の族長の息子が練り上げた《鬼王オーガの妖炎フレイム》よりも上位の炎だった。

それを見ていたのは、サイタマの後ろに控えていたオーガの巫女姫。

「ああ……。あれは……。あの黒炎ほのおは、周囲の魔素を利用した妖術ではありませぬ！ あの炎を形作っているのは純粹にあの者の力のみ。炎の大きさがそのままあの者の力！」  
 凄い主人公っぽい。しかし最早サイタマの頭には既にあの美少女に抱きついていたい衝動で止まらなかつた。

「どうする？ まだやるか？」

歯軋りをする族長の息子。

復讐する機会だというのに、いざ戦えば実力は歴然の差。

仲間も捕らわれ、歯牙にもかけない相手の物言いに、何もかも歯痒くて仕方がない族長の息子。

「若！ 姫を連れてお逃げください！ ここはワシが」

「黙れ爺」

分かつている。

老鬼が言いたいことや、情況的にも。

しかし、それでもこの激情は止まらない。

「無惨に散った同胞の無念を背負ったこの俺が……ようやく見つけた仇を前に逃げろだ  
と？ 冗談ではない。俺に時期族長……いや、頭領として育てられた誇りがある！ 生  
き恥をさらすくらいなら命果てようとも一矢報いてくれるわ」

「……若……それではワシもお供致しましょうぞ」

その言葉に反応したのは巫女姫だった。

「お待ちくださいお兄様！」

「そこをどけ！」

「いいえ！ この方は敵ではないかもしれません」

「なぜだ!? 里を襲った奴と同じく仮面をつけた魔人ではないか！ お前もそう言った

だろう!?!」

「はい……ですが……、昏睡の魔法に抵抗<sup>レジスト</sup>してみせたあの二人のホブゴブリンは、この者  
を信頼して慕っているようでした。わたくしを牽制していた狼も」

その狼、ランガは野生の本能で、サイタマには一切手を出さなかったが、今は既にあ

の美少女の近くまで移動し、何か伝えていた。

「それに、オーク共を率いていた魔人の有り様とは、あまりに違うように思うのです」  
兄より冷静であった妹の巫女姫は、必死に説得している中、ようやく出番が回ってきたサイタマ。

「大人しくしていたが、ここまで見せつけられたら黙ってるだけじゃダメだろうなあ」

サイタマが動き出すと、鬼の若は喜色を浮かべ、妹は不安に戻る。

「サイタマ様！ これ以上の戦闘は」

「ああ、大丈夫だよ。俺だつて無理に戦おうとしてるんじゃない。分相応にしようとしてるだけだ」

そして、俺は青い長髪が似合う魔物たちを率いる美少女の前まで悠然と歩いていく。

「まさか、……お前も」

「そうだよ」

そして、最強を証明するよう、中指を丸め親指でそれを押さえ、そして放つ。

「必殺マジシリーズ《マジ指弾き》」

バチイン!!

その場を支配した爆音と共に、出現させていた強大な《黒炎》を、指弾きだけで消し飛ばした。

これには今度は青髪美少女が呆然とする場面だった。

「これで分相応だな。話し合いをしようぜ」

ここまで格好よく決めていたサイタマだったが、間近で見る美少女に、最早興奮を抑えるのに必死だった。

## 第4撃目「スライムに恋をした《最強》」

恋をした《最強》は勢いを殺さずに、そのまま猛アタックに洒落込もうとしたのだが、恋した美少女はなんと《スライム》だったことに驚きを禁じ得ない。

スライムって、ポ○モンでいうメ○モンみたいなもので、両性なんじゃないかとすぐにそれには思い出すサイタマ。そういうところはオタクな知識を持っている。無くした記憶の手掛かりになるかもしれない。

「スライムのリムルって言うんだ、けど。まさかアンタも、異世界人なのか？」

「異世界人？」

「その……この世界で生まれてこなかった者。この世界じゃない世界からきた奴のこ  
と」

「……恐らく俺もそれだな。しかし記憶がない」

そう言いながら、サイタマは己の格好や、分かったことをスライムのリムルに話す。

「向こうの、地球での知識とかは分かっているのに、名前や生活していたこと、家族の記憶とかが無いだって？」

「ああ、まったくくない」

それはどれだけ不安だったのだろう。

リムルはこの禿頭の男を少し悲しそうに見る。スライム状態だから分かってないと思うが、

「同情してくれるのか。ありがとうよ」

「なぬ!？」

何故か分かった、と言わんばかりにリムルはサイタマを見るが、サイタマは別のことを考えていた。

「それより、スライムじゃなくてきつきの姿になってくれよ。愛でたい」

「おい、常識はどこへやった変態」

欲望が再燃してきた《最強》<sup>サイタマ</sup>だったが、リムルもリムルでサイタマを警戒する。二重の意味で。

はつきり言えば恐ろしいほどの強さである。

『普通』ではない。

そうして、オーガたちの誤解を円滑に解決してみせたリムルたちは、拠点にしている村にへと案内してくれた。

そこでは正しく、異世界知識で発展させてます、と言わんばかりに着々と何もなかつ

たであろう森林の真ん中に立派な村が出来上がりつつあった。

衣食住が揃い、原始染みた生活基準なんてどこかに行き、ランプなど鉄器製品も並んでいる。

これにはオーガの一族たちも驚いている。

一勢力が出来上がりつつこの現状に。

しかし、サイタマは知ったことではなかった。

己が持つ《最強》<sup>チカラ</sup>が無気力に変えていつてしまうから。

何やら宴を催していたのだろう。

ご馳走などがずらりと並び、ゴブリンやドワーフ、魔狼たちなど三々五々に楽しんでいた。

そんな中、楽しんで宴を盛り上げているところから離れた場所で、主にこの拠点の主要たる者たちが集まって、鬼の族長の息子の話を聞いていた。

「豚頭族<sup>オー</sup>が大鬼族<sup>オー</sup>に仕掛けてきただど!? そんなバカな!」

リムルの里に移住してきたであろうドワーフ族の代表であろうカイジンと名乗った男は、飲んでいた酒を吹き出してそれにはお驚いた。それにはゴブリン族の族長・リグド、そして息子のリグルもそれ追従する。

それほどまでに異質だった。

「事実だ」

重く、そして短く。

大鬼族の赤い鬼はそう答えた。族長である父を思い出しながら。

「ありえるのか？ そんなこと……」

「分かりません」

酒が入った樽ジョッキを置いて、カイジンはリグルドに聞いてみるが、答えは同じ。何故か理由が分からなかった。

そんな深刻そうに話してる中、ゴブタが肉串片手に持つて気軽に入ってくる。

「そんなにおかしいことなんすか？」

「ゴブタ」

リグルが『失礼だろ』と目で訴えているのに、それ気付かずモグモグ食べながら話を聞く。

カイジンは記憶にある中、それに答える。

「当然だ。大鬼族と豚頭族じや強さの桁が違う。格下の豚頭族が仕掛けてくるなんてあり得ん」

豚頭族と大鬼族とは強さが違っているにも関わらず、襲撃してきた。

それ事態、無謀に思えることだったのだが、理由があった。

武装し、鎧を身に纏い、森を埋め尽くすほどの圧倒的な戦力。

豚頭族たちよって蹂躪されたのが、大鬼族たちの里だった。

人間たちが身に纏うフルプレートメイルを装着していたことに、カイジンは訝しげに眉を顰める。

「豚頭族がそんな高価なものを用意できるわけがない」

「豚頭族だけの仕業ではありませんな」

「その通りだ！　そして、その軍勢の中に、そいつがいた」

仮面の魔人。

リムルと間違えた人物だった。

ゴブタは『つまりどういうことっすか？』と首かしげに聞いてくると、リグルが纏めた意見を口にする。

「つまり……豚頭族は誰か魔王の勢力のいずれかに与した……ということでしょうか」  
皆が口を重く閉ざして、深い溜め息だけを吐いた。

災いの根元。破壊の体現者。

「ふむ……魔王か……」

※

「魔王なんているのか」

普通ではないサイタマの聴覚をもってして、その会話を寝ながら聞いていた。

もしその魔王という奴が鬼の里を滅ぼしたというのなら、それ相応の報復があっても良いのではないか？ などと一個人で決めることではないことを考えていた最強者に、可憐な少女のようで少年にも見えるこの村の長たるリムルがやってきた。

「もう飯はいいのかよ？」

「ああ、食休み食休み」

集団より少し離れたところにいたサイタマにリムルも一緒になってその場に座った。

「さつきはすまなかつた」

「ああ、なんか俺のこと好きになったとか言ってたけどそうだよな。間違いだった……」

「いや、それは間違えてない。好きだ」

「……………」

リムルこれには流石に閉口する。しかし、問題はそこではなかった。

「いきなり襲ったことだ。しかし、目前に仇の仮面を見つけちまっては収まりきれない  
と思つてな」

「アンタぐらいの力なら余裕だろ？」

「身体はな？ 気持ちまでは抑えきれぬ訳がないだろ」

ほう、とリムルはサイタマの印象が少し変わる。

実はリムルは警戒していた。

同じ異世界人ならば、特殊能力チートを持つているだろう。

そんな奴が、相手を思いやるぐらいの精神を持つていたことに少し安堵する。

「俺が意識をハッキリさせた時に世話になったんだ。オーガの里。……だから、あいつ  
らを無下に出来ない。したくない」

「ほうほう」

「それで、何か提案があつてきたんだらう。ここの大將は」

それぐらい察しがついたサイタマは、寝ていた体を起こした。

「今後の方針だよ。再起を図るにせよ。他の地に住むにせよ。仲間の命運はお前の采配  
だろ？」

「違う」

「違いませぬ」

そこに、赤髪の鬼が側に近寄っていた。

「鬼の頭領が何言つてんだおめー」

「それが、先程の結果でございます」

確かに、大鬼族たちの代表といえはこの赤髪の大鬼族の青年になるだろう。付いてきた仲間たちもそれを認めていたし、それ以外は認めなかった。

だが、本人は悟る。

「俺にはまだ、鬼の頭領たる力量も裁量もまた不足。覚悟はしております。この命を張り、仲間を守り、強さを誇ることに！」

しかし、と拳を強く握る。

「……リムル殿が提案してくれなかったら、俺は命を散らす覚悟で戦っていた。しかも見当違いの相手に、です」

強く握った拳を、何とも情けなく笑いながら力をゆるめた。

「ええ……きつと、サイタマ様が助けて下さったのでしよう。しかし、それではいけないと理解しました。自分に足りないものがあると、貴方の強さの前に知ったのです」

(マジで?)

真剣に話している鬼の青年に対し、サイタマは驚くほど冷や汗を垂れ流す。

自分の強さに何かを悟ったのか？」と。

「ただ力を振るうことは、赤子でも出来る。亡き父からも教わった中の一つ。力を振るう者は、その振るう先をも考えなくてはならないと」

（待つてまつてー……おれそんな大それた考えしてないからあ、その場その場の勢いだからー）

まあ、落ち着けと。静止させようにも鬼の青年は止まらない。

「……俺が鬼の頭領となれるその日まで、サイタマ様が我ら鬼の代表です」

（ひえー！！！！）

恐れいたことに。

重大な責任がサイタマの考えなしの両肩にのし掛かる。

「まて……」

「いいえ！ 俺の……いえ！ 我らの考えは変わりはありません！」

いつのまにか、鬼の青年の後ろには青い髪の鬼と、白髪の老鬼が一緒に頭を下げていた。

「まつ……」

「何とぞ!!」

ひいいん！ とサイタマは無表情ポーカーフェイスを決めながら震えていた。

そんな中、リムルが意味ありげに『ふふふ……』と笑いながら提案する。

「じゃあサイタマが鬼たちの代表な。ハゲだけど。なんか良いじゃ〜ん♪ 鬼たちを纏め上げているのがまさかの角無し鬼！ いいなあ」

「よくないー！」

「ここはハツキリと断らないといけない。

そう思い立ち、リムルに力強く訴えようとすると、赤髪の鬼青年が小さく耳打ちする。

「(もしかしたら……リムル殿のお近づきになれるやもしれませんぞ)」

「よし、分かった。オレが鬼の代表な」

早くも鬼たちはサイタマの取り扱いを分かり始めてきた。

※

早くも方針は決まった。

「オレの嫁になってくれ」

「いやだ」

求婚だった。

「代表同士が結婚することで、異種族たちの繋がりはより強固になるんだぞ!? だったら結婚以外何もないだろ!?!」

「お前それゴブリンやドワーフとか他の種族たちから話を聞いてから決心しただろ!? どうした日本人の慎ましさは!?!」

「ここは異世界だぞ!? そんな日本ルール露となつて消えた! さあ!」

「嫌だ!」

しかし、リムルは逃げられなかった。

(な、なんでスライムの俺が抜けられない!?)

何かの能力なのだろうか。

リムルの《大賢者》による能力をもつてしても、サイタマのステータスが分からなかった。

いや、しかし遅々として少し情報が入ってくる。

「ミエザルチカラ 氣力だあ!?!」

リムルが見たものは、既に狡チいものトだった。

何せ、能力名が分かっても、その肝心の内容が分からなかった。

これにはリムルは恐怖を抱かずにはいられなかった。

『捕食者』による能力を得る力と、『大賢者』による分析や解析、そして『捕食者』によつて得た能力を更に改良、改善、改造して自らの能力へと使える誰にでも胸を張つて言える『特典』<sup>チート</sup>だった。

そんな無敵の強さを誇る能力を持つてしても、解析や分析出来ない相手が出てきた。

(けど！ スライム本来のタップタップ感)と何か俺を抑え込んでないか!?)

『危険……解析不能、分析不能』

『大賢者』も恐れる相手って何!?! と頼れる相棒<sup>スキル</sup>も怯えてるようじゃ無理だ。

加えてリムルは思い出す。己が作り出した《黒炎》をデコピンだけで、魔力など使わずにただのデコピンだけで吹き飛ばしたことを。

『あれ、もしかして、最大のピンチなのは?』と。

もしも、ここでサイタマを放つてどこかに行つたらどうなるんだろう。

(あれ、これって……最大の選択肢<sup>ピンチ</sup>か!?)

選べという!?!

このハゲ頭だけと間違ひなく普通じゃない強さの男を味方にするか、しないかを!?

リムルは神を恨む。

やはり神は二物を与えないのか。俺がTUEEEEEEEEEを許してくれないのか。

「じよ、条件がある！」

「飲もう」

「はやっ！ 決断早いぞ!？」

「愛する者の条件だ。無理じゃないなら飲もう」

一丁前に男前なことを言う。

「お、俺は元はお男だぞ？ それでも良いのか？」

「構わない」

「お前が好きになったのは外見が良いだけのスライムだぞ」

「中身はこれから知っていく。たとえ男だろうと惚れた。中身が外道だったらオレが正道に戻してやる」

それでもリムルはやはり簡単には飲み込めないでいる。それはそうだ。元は男である。今の外見は、きっと『捕食者』によって得た姿。大切な姿。

「お前が見てる人物は違う奴かもしれないぞ」

「オレはお前が好きなんだ」

スライム相手に、このハゲは本気だった。

つい最近会ったスライムに本気だ。

それに、両性ともなったせいとか、男だけの気持ちだけではなく、女性的な面の気持ち  
が芽生え始めてきたのかもしれない。

今の言葉にグツときたものがあつた。

「お前が嫁を持つても構わない。オレはお前の唯一の婿だからな」

「……なんだそりゃ。俺はこれから妻でもできるのか」

「ああ、きつとできる」

なんでそんなに力強く言えるのだろうか。解析不能だ。

リムルの考えが、このハゲの言葉にどんどん解かされていくのが分かった。

「……はあ。ここは男と女を上手く利用するところか」

「ああ、存分に利用しろ。好きな相手と一緒に居られるならそれだけで本望だ」

リムルは依然とスライムのままだが、決めた。

何より身の危険と、我が街の為にも。

しかし、何より。

残念ながらこのサイタマという男は誠実にして真摯だった。この男の想いに嘘は無  
いと感じてしまった。

こうして、何故か今後の方針（別の意味でも）が決まった。

サイタマとリムルの政略結婚。国家間とは言えない小さな里同士の決め事だが、ここにそれが成った。

今後、この二人が活躍することが否が応でも知ることになるうとは、まだ誰も知らなかった。

## 第5撃目「ガビル参上！」

異世界人が協力し合うこと事態珍しいことではない。

しかし、お互い協力関係になるまでどれだけ長い道のりで関係を築いていけるかが問題だった。

『言葉を交わし、意思を確かめ合え、利益を考える』のが思考を持った生き物の特権であり、弱点でもある。

そこをどうにか円滑に進めていきたいと考えるのが上に立つ者の役割ともいえる。

それ故に、

「リムル様と大鬼族オーガの代表、サイタマ様が夫婦となることになったのですか？」

ゴブリン族代表の筋骨隆々とした男、リグルドがリムルとサイタマに確認するように訊ねる。

「今のところはな！ 余り大々的には言い伝えないで欲しいけど、お互いの利用価値を熟慮した上で……」

「ここに永遠の愛を誓おう!! 我が妻のリムルちゃん♡♡」

「は・な・れ・ろおおお」

青色長髪の美少女然とした人物、リムルは禿頭とくとどうとヒーローに拵えたマントと衣装を着ている男、サイタマにハグを受けていた。

「良かったですな。サイタマ様、リムル様」

そう呼んできたのは、燃えるように赤い髪と、角を生やした青年からだった。

「ベニマル、ありがとう」

心底嬉しそうに言うサイタマを横に、リムルは頭を抱えていた。

「いいのか？ サイタマが頭かしらだったのなら、サイタマに名付けをしてもらった方が……」  
「勿論、それも考えましたが、これはサイタマ様と相談した結果です。サイタマ様と夫婦となったリムル様は我らの主とも変わりませぬ」

跪くベニマルに、サイタマが続く。

「無気力で、力だけある危険な主より、皆のことを考えて行動するリムルの方が良いと思っただよおれは。それにどうやら……」

サイタマは手をリムルに向け、

「おれは強さの変わりに無気力になる呪いみたいなものがあるのを確信した」

「なに？」

「いや、頑張れば動くことも可能だけど、これはヤバイな。脳と言うか、体からと言うか、

そこかしこから『怠慢に生きろ』と押し寄せてくる」

サイタマに言うには、何かしらサイタマの関心があれば力は発揮されるが、それでも『無気力』に襲われるらしい。それが力の代償。

『予測、強大な力に対する世界の抑止力として用いられた対価と思われます』

(対価、か)

大賢者による予測を聞きながらも、何かしら枷があったことに人知れず安堵するリムル。あのサイタマの力はひよつとするとリムルの《捕食者》や《大賢者》並か、それ以上の反則級特典チトかもしれない。

「それにな……俺といるより、リムルと一緒にいた方が仇には会えると思ったんだ」  
「……そういえばその問題があったな。お前のせいで次々と忙しいかも」

生き残りの大鬼族6人を名付け、そしてそこから得た情報だと、大鬼族の里オウが豚頭族クに襲われて、滅ぼされたと聞く。

その豚頭族の軍団の進撃は止まらず、ジユラの大森林周辺を荒らしているという。

※

サイタマとリムルが結婚したことは、知る人が知るだけになった。リグルドが仲間たちに教えた様子だったが、リムルの精神衛生上よしてくれ、と頼み込んだので余り広く知れ渡ることもなさそうだった。

しかし、サイタマがリムルに対して愛情表現が止まらないので嫌でも知れ渡るが、リムルは己の感情より、強大な戦力が加わることを思つて我慢していた。

そんな折りに、戦闘経験豊富な剣鬼・ハクロウに稽古をつけてくれ、と頼んだリムルたちは鬼コーチの指導のもと、鍛えられていた。

訓練をしている中、ベニマルと一緒にハクロウの木刀とは思えぬ切れ味を避けつつ、リムルに語る。

「豚頭帝？ オークロード なんだそりゃ？」

「まあ簡単に言うと、化物です。サイタマ様に比べれば赤子ですが……」  
「うええ……サイタマそんなにかよ」

デコピン程度でしかサイタマの強さを把握していないリムルにとって、それは重大だった。

「数百年に一度、豚頭族オウクの中に生まれるといわれている特殊魔物ユニークモンスターです。なんでも、味方の恐怖の感情すらも喰らうため異常に高い統率能力を持つんだとか」

「うへえ」

「里を襲った豚頭族オウケどもは仲間の死にいたるまで怯むこともなく進軍してきました。あれにはこちらも精神にきましたね……」

「なるほど……」

「まあ可能性でいや非常に低い話です」

「他になにか心当たりは無いのか？　里が襲われた理由」

「……そうですね」

ベニマルは思い出す。リムルと衝突する理由となった原因を。

「関係あるか分かりませんが、襲撃の少し前にある魔人が里にやって来て『名をやろう』だとか言ってきたんです。俺を含め全員から突っぱねられて結局、悪態をつきながら帰って行きましたがね」

「魔人ねえ。そいつから恨みを買ってるかもしれないってことか」

「仕方ありませんよ、主に見合わなけりやこつちだつて御免だ。名を付けてもらうのも誰でも良いってやけじゃありませんからね」

笑顔でそう言ってくるベニマルに、リムルは恥ずかしがる。

「そいつの名前はたしかなんだつたか……ゲレ……ゲラ……ゲロ……」

「ゲルミュツドだ」

「そう、それだ」

名前が出てこないベニマルの変わりに、影から現れた大鬼族の一人、ソウエイが変わりに答えた。

(ゲルミュツド……なんか聞いたことあるような気がする……あつ)

それは、ゴブリン族の代表であるリグルドの息子、リグルと会話していた記憶。リグルの兄の話だった。

リグルの兄は、通りすがりの魔族・ゲルミュツドに名付けしてもらった話だ。

(魔王軍の幹部ゲルミュツド、同じやつっぽいな。あちこちで名前を付けてるのか？なぜ?)

「報告がございます、リムル様」

「お、そうだったソウエイ、どうかした?」

「リザードマンの一行を目撃しました。湿地帯を拠点とする彼らがこんなところまで出向くのが異常ですので、取り急ぎご報告をと」

「リザードマン? 豚頭族オウクじゃなく?」

「はい、なにやら近くのゴブリン村で交渉に及んでいるようでした。ここにもいずれ来るかもしれません」

「そうか……リザードマンが……」

熟考するリムル。

取り合えず、いい予感は全然してこなかった。

※

シオン、大鬼族の長身でスタイル抜群の女鬼にその名を授けたリムルは、大変なつかれていた。

強きものに仕えるのは鬼の戦士として光栄、とかんがえる種族性かもしれないが、スライムで抱き心地最高なリムルは可愛くて尊敬できる主となっていた。しかし、これは別にリムルだけに対してではなかった。

「サイタマ様とリムル様にお食事を用意しました！是非とも食べてくださいね♡」  
満面な笑顔を向けるシオンに、リムルは何か違和感を。サイタマは無表情にそれを迎える。

そのしつかりした見た目のイメージと合わさって、秘書としてリムルの側に仕えることになったシオンに、思わぬ一面が見れた。

そう、それは、

「お待たせしましたー♪」

出されたのは食材の冒瀆だった。一体どうしたら、食材を青と紫と黒の色と化すドロドロの液状に溶かすことができるのか疑問が浮かんで消えていった。

リムルの表情は死んでいく。せっかく手に入れた味覚を失わせるこのイベントは、間違ひなく死亡フラグだった。冗談抜きにしても。

(漫画みたいな展開だけど、どうしてリアルに直面しないといけないメシマズイベント！ いやだナニコレ!? 食材の冒瀆だぞ!?)

溶かされた食材の悲鳴が聞こえてくるこのシオンの料理を、リムルとサイタマは食べないといけなくなったのだ。

これこそ、主としての役割とも言える。

食堂の端に座るベニマルとハクロウは静かにこの光景を眺めていた。

(いや、助ける!?)

だがきつとこの料理を食べたことがあるのだろう鬼の戦士たちは、一切こちらを助ける様子になかった。

「さー！ リムル様どうぞ♪ サイタマ様も！」

「……そ、そうだな」

「今回もすごいな、シオン」

なんだと!? と隣に座る傑物を見るリムル。

この未元物質ダークマターを食べたことがあると言った男を見る。

「アーン、してくれるなら食べるぞ、リムル」

小声で助け船を出してくれたサイタマだったが、それはそれでリムルの精神を削る行為だった。最早、現世というか元人間だった記憶は思い出さない方が簡単なのかもしれないと錯覚し始めた。

しかし今問題なのはそこじゃなかった。

（くっ！ 俺がサイタマにアーンする以外の方法は無いのか大賢者!!）

『解。視覚を閉ざし右斜め後方にスプーンを突き出せば、命は助かります』

（よく分からんが分かった!）

こうして、リムルはサイタマにアーンすることもなく、偶然通りかかったゴブタに食わせたことで、リムルは生き残ることとなった。

今後、シオンが人に出す飲食物はベニマルが確認して許可してから出すようにと決められてしまった。

ゴブタは多大なトラウマと共にお開きとなった。

※

そんな一幕がある中でも、問題の豚頭<sup>オリク</sup>族進撃の話はリムルたちが住む村にまで及んでくる。

「アイツらか?」

「はっ」

場所は変わって、何気なくソウエイと一緒に付いてきたサイタマは、木の上から<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人族の一行を監視していた。

「近隣のゴブリンの村から協力を取り付けてきたリザードマン。先程、交渉していた村から情報を掴んできましたが、あの一行の代表はガビルと名乗っていたそうです」

「名前<sup>ネーム</sup>持ち<sup>ド</sup>ちかよ」

「はっ。実力は不明ですが」

目立つ格好のサイタマなのだが、ソウエイに負けず劣らずのその場で身につけた見様

見真似の気配を殺し方で様子を見てみると、どうやら次はリムルたちが住む村に向かつて行った。

「戻るか」

「承知しました」

サイタマとソウエイはすぐにその場から消えるように移動した。

アマリ時間をかけず、すぐに村に着くと、

「帰ってきたか、サイタマにソウエイ」

スライム状態でリグルドの肩に乗っているリムルに声をかけられる。

「今ちようど、リザードマンの使者が来たらしくてな。会いにいくところだ」

「意外と早かったなソウエイ」

「別動隊が居たのでしよう」

うん？ と可愛らしく疑問に思っているリムルに軽く説明をしながら、リザードマンの使者のところに向かう。そこにベニマルたち大鬼族たちも気になる思惑を感じていたのか、同行することになった。

最早、村の主要人物たちとなった者たちでそこに向かうと、一人のリザードマン、兵士のような格好の者が一人立っていた。

一人なのかと思っていると、奥から部下を引き連れたリザードマン一行が妙に芝居か

かった演出でやって来た。

「ご尊顔をよく覚えておくが良いぞ、この方こそ次代のリザードマンの首領となられる戦士！」

「我が名はガビル！ お前らにも我輩の配下になるチャンスをやろう!!」

おおー！ いいぞー！ パチパチパチパチ！

ガビルの部下たちは盛大な名乗りを上げた戦士に称賛の嵐を送るが、

「はあ？」

リムルたちは嵐の如く、静かにガビル<sup>それ</sup>を見た。